大阪教育大学紀要　第Ⅳ部門　第54巻　第2号　173～185頁（2006年2月）

成長の出発点としての就学前期の生活経験の意義と課題
―― 日常生活空間に存する教育資源の活用と環境改善への試論 ――

飯島敏文（いいじま としふみ）

社会科教育講座

（平成17年8月31日　受付）

本稿は，就学前の子どもの日常生活に存する事物あるいは事象の一切を教育的契機として位置づけ，それら教育的資源の有効な活用をはかるための指針と具体的方略及び課題を提起することを目的とするものである。それら教育的資源がいかなる教育的価値を孕んでいるか，さらに教育的価値を発現する上で妨げとなる懸念のある諸要素をいかに把握し，逆にそれらを価値ある諸要素に転換するための手だては存在するという見地から，可能な限り具体的に「日常経験の教育的価値」とその機能の仕方を記述してみたいと考える。

筆者はこれまで20世紀初頭おけるドイツの Heimatkunde，昭和初期の郷土教育論及び実践，さらに戦後の地域学習の役割の再評価を通して，子どもの経験という視点から郷土すなわち日常生活空間が内包する教育的価値の解明にアプローチしてきたつもりである。本稿では支障ない範囲で「郷土」を「日常生活空間」と読み替えることで，子どもの日常生活における教育機会を抽出し，その意義と課題を考察してみるつもりである。

さて，子どもの日常生活における教育的契機が多数見いだされ，その教育的機能の有効性が期待されるとしても，そしてさらにその有効性が疑いないものであるとしても，教育機会を提供し制御する主体が誰であるのか，またその人的・物質的支援は何人が責務を負うべきであるのかということは，教育の営みの中で常に問い直され続けなければならない課題であると思われる。筆者は学校教育における教科教育専攻に身を置いているが，教科教育の授業で実現可能である側面は一般に世間で認知される範囲を遙かに超えるものであるということを前提としてみても，授業を中心とする学校教育の中では実現が困難である側面があることを看過することはできない。そもそも教科教育を前提とした授業は成長のすべてをカバーしうるものではない。だとすれば，教科の授業を超える部分に対して，さらに就学前の子どもたちに対して我々はいかなるアプローチが可能であるのだろうか。

学校教育を構想し運営する教育委員会や教師たちばかりではなく，国家・自治体さらには地域社会の市民がもっと意識的に教育を支援しなければならないのではあるまいか。国家が責務を負うのはすべての国民に平等な教育機会を提供することであり，学習指導要領に示されるような水準の学力・能力を身につけうる条件を確保することであり，そのことをもって我が国の国民・市民としての最低限の資質を身につけさせる機会を保証することである。子どもの個性のどこを伸長させ，どのような人間として育てるべきかということは学校や国家が決めるべきことではあるまい。それは第一義的には子ども個人の意志によるものでなければならないし，そして次には保護者の教育方針によるものでなければならない。子ども自身あるいは保護者の思い描く社会観・人間観が「公共の福祉」に反しない限りは，学校や国家にそれ以上の方針強要の余地もないし，その権利もないはずである。

近年の学校教育現場で，学校側と保護者側の意思疎通の失敗から児童・生徒と担任教師の間に学級運営上の支障が生じていることを耳にすることが多くなっている。以前から言われているような，保護者の高学歴化にともなう教師の社会的地位の低下，学校と家庭の教育的機能分業の崩壊などさまざまな要因があるであろう。こうした問題は可視的に統計的に考察することが難しいばかりではなく，社会的な枠組みからの考察が個性的なひとりの子どもの教育という営みにおいて具体的な指針とならないという事情にも原因はあるだろう。保護者や地域社会と学校との協力関係の構築が今は急務なのである。そして，協力関係の構築のためにもっとも留意されるべきことは，子どもの「望ましい社会

観・望ましい人間像」を共有することである。筆者は，家庭の側に無制限の教育方針の自由が許されているとも考えない。学校教育は子どもの学習能力の向上を担うのみでなく，それ以上に子どもの社会化という任務を負っているはずである。その学校の責務を阻害するのは保護者の利己的な主張に過ぎないことを改めて確認しておかなければなるまい。

望ましい人間像は，理念的にはいくつもの命題で提示することが可能である。自主性のある子ども，創造的な子ども，個性的な子ども……等々である。これらの諸目標は極めて抽象的であるため，批判的解釈の余地が少なく，そのスローガン自体に異を唱えることは難しい。しかし，理念が正しくともそれが現実の子どもの指導方針を無条件に肯定するものではないこともまた明らかである。理念的な目標はしばしば具体的な場面において価値の対立や矛盾を露呈する。このことは「望ましい社会観・望ましい人間観」のレベルでの共通認識は，現実的な機能不全をもたらしかねないことを物語っている。抽象的な社会観・人間観は，「その実現プロセス」における共通認識の成立をもってはじめて「共有」「協力」が可能になるものであると考える。

現在の教育の混乱，教育機関への不信は，社会的に通用するような「望ましい社会観」・「望ましい人間像」が共有できていないばかりでなく，それ以前に，共有の当事者であるところの保護者や教育者たちの中において「望ましさ」が具体的な像を結んでいないからであると思われる。「望ましさ」を明確にイメージ化できるかどうか，それを矛盾なく一個の人格の中に形成していけるかどうか，まさにこの点に子どもの将来，さらには我が国の将来の行く末を左右する要因が内在していると考える。

キーワード：日常生活，子ども，幼児，理念の共有

I　はじめに

筆者が就学前教育に関する考察をおこなうのは，10数年ほど前に「保育内容　社会（人間関係）」の授業を担当して以来のことである。これまで筆者は主として小中学校の教科教育の授業という場面における子どもの成長への働きかけに関して考察してきたわけであるが，自らの長子の誕生にともない，乳幼児期の家庭内教育及び幼稚園教育並びに保育という年齢期を具体的なテーマとして意識するようになったゆえである。以前，幼稚園教育要領の改訂によってたとえば「保育内容　社会」が「小学校社会科」への準備段階のように位置づけられる傾向が生じたため，幼稚園教育と小学校の教科教育との違いを明確にするような改訂が行われたことがあった。たしかに幼稚園教育の領域を小学校の教科と直接的に連続させるような形式は好ましくない部分があったと思われるが，幼稚園と小学校以降の学校段階は一人の子どもにとっては連続する成長プロセスの一局面であることに疑いを差し挟む余地はない。学校段階としては明確な相違があったとしても，幼児から学童期の成長という一連の流れはあくまで一個の人格発達に関わることであり，その発達の連続性を確保するためには，教育的営みを一連のプロセスとしてとらえる視点は欠かすことのできないものであると考える。筆者が小中学校の教育に対して「郷土」という概念を手がかりにして「日常生活経験」の教育的機能についての考察をおこなってきたこと（それはすなわち環境が人格発達の主たる担い手であるという考え方なのである）を，就学前教育のあり方を考え主要な観点として尊重していきたいと考えるのである。そのことは就学前教育の意味づけの変更を意味するものではなく，就学前教育の充実に資するものとして位置づけていきたいと考えるのである。

小学校以降の教育において生育環境は，子ども自身による対象選択等がある程度可能であるという意味において制御可能な部分を有している。それは環境からの刺激を受容する側であるところの子どもが，直接的に環境への働きかけをおこなうことによって環境刺激

のフィルタリングが可能であるからである。しかし乳幼児の教育にとっての環境は，保護者や教育者が任意に制御可能であるような資源ではない。日常生活空間の教育的価値のフィルタリングが困難であることを考慮すると，実態としての環境を可能な限り正確に緻密にとらえる必要性が生じてくる。これまで観念的にとらえていた諸要素がきわめて具体的・現実的な問題としての判断を必要とするようになるということである。

筆者の生年は1961年であり，長子の生年は2003年であるから，42年の隔たりがある。しかしその年月の隔たり以上に子どもの生育環境の変化は著しいという思いがある。それは決して懐古趣味でも感慨でもなく，極めて多くの客観的な指標によって裏付けることが可能な差異である。1960年代はいわゆる高度経済成長のさなかであった。我が国の復興の証としての東京オリンピックの開催があり，新幹線と高速道路の開通があり，多種の耐久消費財の急速な普及があった。地域による温度差があるため一概に断定することはできないが，終戦から10数年を経た当時，戦争の傷あとは少なくとも筆者の日常生活空間にはほとんど見あたらなくなっていた。その後も我が国の経済的発展は継続し，前世紀末のいわゆるバブル経済と呼ばれる時期を経た我が国では，公共施設や家庭の耐久消費財（自家用車や各種家電製品など）はかなりの普及率に達したと見てよいであろう。筆者の世代よりも筆者の子の世代である現代の方が少なくとも生活利便性は向上しているのだと言ってよいだろう。我が国を将来的に危うくするであろうはずの少子化ですらも，個人の成長にとってはプラスに作用する部分が少なくない。多人数の兄弟姉妹が珍しくなかった筆者の両親の世代に比べれば，現代の子どもが親族から受ける精神的・物質的な刺激や庇護は間違いなく手厚くなっているはずである。

それにもかかわらず，現代の子どもが将来いかなる社会に生きるのかという展望において，まったく楽観が許されないのは何故であろうか。2005年上半期の人口統計速報値では，死亡者数が出生者数を3万人ほど上回ったことが報じられている。「人口減少社会」は将来の危惧ではなく，もはや今現在の現象なのである。出生率の低下がもたらした我が国の急激な高齢化や国家財政の危機なども深刻な社会問題であるが，それ以上に「我が子」がいかなる社会を生きねばならないかという見通しが立たないことへのの漠然とした不安は，保護者ばかりではなく社会に蔓延していると思われる。

国家財政の健全化の問題は解決がたやすい問題ではないとは言え，問題の所在が明確に意識され問題解決へのアプローチをいくつもシミュレートすることが可能である。行政や立法の方針によっては改善の余地を多分に残している課題である。しかしながら，発展と膨張を続けてきた我が国の大人たちが，衰退し縮小しつつある我が国を想像するのは非常に困難であり，概して悲観をともないがちである。これまで自明のこととしてきた社会的な諸条件も，昨今の政府主導の「構造改革」の中で崩れつつあるところである。それは戦時中の状況とはまったく異なる意味で危機的であると言ってよい。我が国が発展と拡張の路線を再び希求しようとするものは少ないであろうが，仮にそれを求めてもかつての繁栄を得ることはもはやあるまい。こうした我が国の衰退と縮小の時期にあって，子どもたちがいかなる社会観・人間観を持ち，来たるべく社会を生き抜くために身につけるべき知識理解と態度能力は何であるのかという問いを検証し，新しい社会像・人間像をイメージし，新しい教育像を再構想しなければならないという点において，大きな岐路に立っているのだと思われる。いずれを重視して保持しいずれを改善・改革すればよいのかという現状認識と将来予測・将来展望ができるかどうかということがその岐路を選択する大きなよりどころとなってくるはずである。折しも衆議院解散・総選挙を前にした2005年8月現在，そ

の長期的展望を意識した政見を披露し，それを評価するような投票行動を取るために比較検証可能な具体的・現実的マニフェストを目にすることができないもどかしさを感じている状況である。有権者の正しい選択を期待するには情報不足の観が否めない。

この期にあたって，子どもの望ましい成長とは何であるのかという哲学と，その成長を支援する諸条件・諸因子が何であるのかという確かな見通しをもてないままでは，保護者や教育者そして地域社会の人々は自らの行動指針を確立することができまい。それはすなわち永続的な教育の機能不全を意味するものである。教育の機能不全は必然的に数年後から1世代後の我が国の凋落をもたらす主因となる。すなわちそれは回避されあるいは克服されなければならない至上の課題であるわけである。教育の機能不全を回避するために，子どもの成長を支援する人々が確信を持たねばならない。それは現実を離れた幸福論や人間論のみに依拠すべきではなく，現代の子どもがいかなる環境におかれているか，その益と害はどこに存するのかという分析的アプローチから始められるべきであろう。さらにそれは現代の子ども一般に対して法則化できるようなものであるべきではなく，個々の子どもの条件に応じられる可塑性もしくは柔軟性を備えているべきであると思われる。個々の子どもの条件に応じる前提として，個々の子どものあり方の把握が必要であることは言うまでもないことである。

Ⅱ　子どもの日常生活環境の特質と諸問題

1）ライフスタイル

利便性という尺度においては現代の我が国はおそらく世界でもっとも優れた条件を備えていることであろう。狭い国土のさらに狭い平地に人口が集中しているため，交通網や通信網はほとんど完璧に整備されていると思われる。大都市圏では交通網の充実整備が継続され，郊外や地方都市においても自動車を手段とする交通網の整備は継続している。情報社会と言われる現代に必須である社会基盤もかなり整備されている。携帯情報端末（多機能携帯電話を含む）はほぼ全世帯に複数台普及し，インターネット接続においても1割近い家庭に光ファイバー通信網が引き込まれ，薄型ハイビジョンテレビの普及も急速に進んでいる状況である。

しかし，この全国的な利便性の向上は，地方都市の個性を喪失させ，交通渋滞・環境破壊・犯罪発生などの負要素を郊外や地方都市に拡散させる原因にもなっていることは事実である。選挙においては地縁・血縁の政治システム，巨額の郵便貯金が利権構造の温床になっているという批判を耳にすることがある。地縁・血縁は日常生活においては重要な「つながり」であり一概に否定することはできないが，このたびの総選挙に見られる傾向は今後の地縁・血縁の希薄化・無力化がさらに強まるであろうことを指し示すものである。地縁・血縁の希薄化はその必然的帰結として，家庭という集団の相対的地位の向上を意味している。しかし，このことは，家庭の中においては居心地がよいけれども，いったん家庭の外に出ればどのようなリスクが潜んでいるかわからないという不安から子どもと近隣の接触機会の減少を加速させる側面を孕んでもいる。ここ10年ほどの治安の急速な悪化は，家庭外・学校外のリスクの増大として顕現しているばかりでなく，家庭内・学校内でさえももはや子どもの安全地帯ではなくなっていることで社会の失望感・不安感を増大させている現状である。

2）乳幼児のスクール通い

さらに保護者がともに勤労世帯である家庭が増加するのにともなって，子どもの日常生活では新たに保育所やおけいこごとの占める比重が増しつつある。保育所のみでなく，乳幼児を対象にした水泳教室や英会話教室などが無数に開かれ，そこにおける人間関係が主となるような現象が生じているのである。10年20年前と現在の子どもを比較した資料は決して少なくない。しかし，通塾率の増加や学習・読書時間の減少といった数値の指標を参考にすることはできるが，それ自体がリアルな子どもの実態を示してくれるわけではない。下校後は塾に通い，テレビゲームで遊ぶといったステレオタイプな子ども像をオーソライズするための材料になる程度である。

筆者はこのような「早期教育」を一概に批判するものではないが，保育所やスクールに子どもを任せている多くの保護者が，我が子の発達を，他の子どもと比較可能な限られた指標によって把握していることにも危惧を感じることがある。それは言わば受験戦争と呼ばれた現象の中で見られた「偏差値偏重」の傾向と通ずるところがある。諸スクールの指導者は必ずしも幼児教育の専門家であるわけではない。成人に教える内容を限りなく希薄化して幼児にレッスンをしているのみというスクールもある。

義務教育段階やその前の幼稚園教育の段階に関しては専門職としての「教諭」があり，学習指導をしてくれるわけであるが，子どもに対してもっとも影響が大きいのは家庭環境なのである。6歳までに形成されてしまったパーソナリティをその根本から大きく転換することはおそらく不可能である。だとすれば，就学前の子どもにとってのもっとも重要な教育者である保護者こそ「教育」「保育」に関する十分な見識が必要なのではあるまいか。子どもを私塾に行かせることを批判するものではない。我が子の成長発達についての十分な把握と十分な見通しなしに，成人教育のカルチャーセンターのような感覚で子どもに習い事をさせることは保護者の自己満足でしかないと思えるのである。幼児の教育は，幼児の個性を十分に把握した保護者によってなされるのが当然であり，細分化された分野のインストラクターにスキルの指導を任せるのみでは子どもの成長は期待できまい。

3）ジェンダー

近隣との関係が希薄になったとは言え，小さな子を連れているとしばしば中高年の方から声をかけられることがある。そうしたコミュニケーションの中で気になることは，服やベビーカーの色について「女の子なのにかわいそうに！」という非難を受けることがしばしばあることである。筆者の個人的な嗜好が関与していないとは言わないが，「女の子であるから花柄や赤色系の色でなければならない」というのは，本人の好みが定まる前に服装や持ち物の点からジェンダーを規定されることではあるまいか。就学前にジェンダーを規定されてしまっては，それ以降の年齢においてその束縛から自らを解き放つことは難しい。

子ども用玩具店のアドバイスも気になることがある。最も多く見られるのが「性別と月齢による玩具の法則化」のようなアドバイスである。玩具店は個々の子どもの成長や個性を把握しているわけではない。もっとも平均的な遊び方に関する情報を持っているだけである。幼児の発達について多少なりとも学んできているという自負は，それが唯一正しい玩具選択であるかのような錯覚を起こさせるらしい。我が子についての把握が十分でなければ玩具店の勧めに従うしかあるまい。しかし，遊びを通して子どもが成長するという意義に立ち返って考えれば，平均的な遊びのスキルを持たせなければならない必然性はどこ

にもない。あくまで玩具の選択は個々の子どもに応じたものでなければならないはずなのである。このように性別や月齢によって服装や持ち物や遊びを規定することは，子どもが成長しようとする方向性に干渉し，束縛することである。それは子どもの可能性を伸長させることではなく，幼児としての常識的なスキルを身につけさせることに終わるのみであろう。

4）少子化

合計特殊出生率が一向に上昇に転じず，昨年よりも低下したことが報じられたのは2005年8月のことである。速報値から推測すれば，我が国の人口は間もなく減少に転ずることであろう。高齢化社会にあって我が国では年金問題を初めとする重要課題が山積しているが，少子化という現実が子どもに対してどのような影響を与えるのであろうか。兄弟姉妹が多かった半世紀前と比べれば，兄弟姉妹との関係を築くことができない反面，ひとりの子どもに十分な世話ができる面もある。近年の教育コストを考えればひとりの子どもに十分に手をかける方が良いのではないかという傾向になるのもやむを得まい。また，子育てを含む「家事」の労働的な価値が極めて軽んじられ，「専業主婦」という選択肢を排除するような施策が次々と打ち出されている現況では，両親が子育てに十分に関与することができないケースも多々見られる。子の祖父母が極めて遠方に居住しており，祖父母から子育てに対する支援を得ることが難しい世帯はまれではない。完全なる核家族においては，子どもを育てることに対してかなりの負担と困難を伴うことになる。

5）都市化の弊害

筆者は3年前までマンションの高層階に居住していたため，雨音や鳥や虫の声を室内で聞くことはなかった。長子の誕生前に一戸建てに移り住んだため，鳥や虫の姿を見ることもできるし声を聞くこともできる。都心ではないので比較的生き物を目にする機会は多いと思われる。庭に小鳥を招くための餌台を設置したり，花がよく見えるように花壇を作ったりしてみた。生け垣には興味を示さない子も花には関心を持ったようで「これは？」と尋ねる。餌台に雑穀を啄みにくるスズメにも関心を持ったようで朝起きてくると「スズメさんいる？」と言いながら庭を眺めるようになった。

里山に近い自宅には多くの昆虫がいる。チョウ，トンボ，バッタ，クモ，アリなどの昆虫を目にすれば子は「これは？」と筆者に尋ねるし，セミのように鳴き声を出す昆虫にはかなりの関心を示すので小学生向けの図鑑を使って，アブラゼミ，クマゼミ，ミンミンゼミ，ヒグラシ，ツクツクホウシなどの名前を教えてみた。子はセミの声が聞こえるたびに図鑑を広げて姿と名前を確かめている。立秋を過ぎてからは庭にコオロギの声を聞くようになった。セミと違う鳴き声に「チーチーチー。これは？」と筆者に尋ねる。コオロギであることは教えたがあいにく子はまだコオロギの姿を目にしたことはない。実物を見たこともないのに，図鑑だけでコオロギを知るというのは「机上の知識」に過ぎないという指摘もあろうが，すべてを図鑑で覚えるのではなく，実物との対応関係において図鑑を見るというのはほとんどの情報を間接的にしか得ることのできない現代社会の生活においては身につけておくべき能力であると筆者は考える。

しかしながら，郊外であるとはいえ我が国の人口のほとんどは大都市近郊に集中している。筆者の自宅も山を隔てて大阪府に隣接している地域である。ヒートアイランドの影響も多少なりともあるであろうし，何よりも大都市に近いことで大気の汚れや夜間の灯りは

避けがたい面がある。月やシリウス程度に明るい恒星は夜空に見えるが，1等星すらほとんど目視できない現状である。ましてや空を横切ってゆったりと流れているはずの天の川はまったく確認できない。河川の汚染も著しく，川べりに降りて水生生物を観察できるような場所はない。「準備された環境」すなわち水族館や博物館や公園などで自然のサンプルに触れることが精一杯の部分が少なくないのである。

確かに子どもは今後も都市部での生活を継続するであろうし，そこでの生活において筆者の世代と同じような自然体験を得ることは求められないかも知れない。しかし，人間という存在もまた自然の一部である以上は，自然の営みが正しくおこなわれている場面を体験すること，自然が厳しく壮大なものであることを実感することもまた大切なことではあるまいか。と同時に，極めて自然の奥深くまで入り込んでさまざまな開発をおこなってきた先人の営みの功罪についても知る機会を準備するべきではあるまいか。このように考えるとき，幼児の言語習得に関して一抹の不安を感じることもまた事実である。事物や事象をコトバに置換したときに，幼児の知識欲は一応充足されるのかも知れない。しかしながら，ヒグラシの姿を見たこともなければ声を聞いたこともない筆者の幼児時代の自然体験が，子のそれに比して劣っていたと断言することには躊躇を覚えざるを得ないのである。名も知らぬセミが「カナカナカナ…」という声を発していることを発見した時にはある種の感動を覚えたものである。事物や事象に名を与えてきたのは人間の文化的活動のひとつである。すべてを体験することが不可能であって，なおかつ体験したこと以上の知識を活用しなくてはならない現代社会にあって，コトバを習得することの重要性は論を待たない。しかし，コトバを習得することによって幼児が何を獲得し，コトバを習得しなければ発見できたであろう何を見失うかと言うことに関しては十分な顧慮が求められるのではあるまいか。その顧慮を行うべきは幼児にもっとも身近な保護者であり，自らの子に適していると思われる指導のスタイルも含めて考慮すべきことなのであろう。何よりも経済効率によって変質しつつある我が国土においては，都市居住者のみが現代社会の利便性を享受し，農村生活者はその利便性をさらに奪われているという事実が，子どもの自然との乖離を助長しているであろうことは間違いない。

6）遊び空間と遊具

子の出生まで意識的に観察することは少なかったが，乳幼児の遊び空間や遊具に関しても一世代前とはかなりその様相を異にしているようである。筆者の目から見てもっとも気になることは巷にあふれる「キャラクター商品」である。「アンパンマン」や「機関車トーマス」，「ハローキティ」，あるいはＮＨＫの幼児向け番組の「グーチョコランタン」，月刊絵本の「しまじろう」等々のさまざまなキャラクター商品の種類が爆発的に増えているのである。20年ほど以前に「２次元コンプレックス」というフレーズがよく聴かれた時期があった。生身の人間に恋愛感情を抱くことのできない，あるいは生身の人間から自らを否定されることをおそれ，アニメーションの中の特定のキャラクターに対する疑似恋愛に陥っている青少年の心的現象である。確かに幼児向けのキャラクターにはほとんど恋愛の対象となるようなものは見受けられない。しかし，「正義の味方」としての「アンパンマン」というキャラクターや書籍に興味をもつばかりではなく，パッケージが「アンパンマン」であるというだけで，子どもたちの物欲をそそるような商品が極めて大量に流通しているのは間違いない。子どもたちはその「パッケージ」のアンパンマンにどのような価値を見いだしているのであろうか。テレビと絵本の中にしか存在しないアンパンマンに子どもた

ちは憧れを感じるのであろうか。それを身の回りに多数並べて満足するということは何を意味しているのであろうか。筆者の幼児時代にも「キャラクター」商品がなかったわけではない。たとえば「鉄腕アトム」である。子どもたちにもわかりやすかった「鉄腕アトム」はアンパンマンのように正義の味方であり，子どもたちの憧れであった。しかしアトムの活躍や感情の揺らぎは，「子ども限定」ではない普遍性を内包していた。商業主義でない作者の世界観というか哲学が吐露された作品中には，成人にとっても容易に解決しがたい難題があった。その主たる違いは何だったのであろうか。

筆者はそれを哲学ととらえる。アトムが抱える諸問題はまさに人間社会にとってのテーマでもあった。勧善懲悪の図式に割り切れない葛藤をはらんだまま子どもたちに提示されたのである。「アンパンマン」との違いは「リアリティ」である。アトムはリアルな現実問題の中にテーマ性を見いだしていた一方で，アンパンマンはキャラクターの正義感と悪者退治という一面的な価値観しか読み取ることができない。こうしたキャラクターに囲まれることは，子どもたちの現実感覚を衰えさせる遠因となるおそれはないのであろうか。

7）幼児の情報空間

学童期の情報過多はしばしば問題にされることであり，家庭内で過ごす子どもたちが触れる情報は保護者とほとんどかわらない。これは幼児にとっても同様である。理解力・判断力の面で成人とは異なる幼児にとって，同じ情報に接していたからといって保護者と同じ理解を得ることができるわけではない。しかしながら，悲惨な光景も暴力や性の映像も目にすることができるのは事実である。現実と虚構，モノと生き物の峻別さえおぼつかない幼児にとって，テレビから受け取る映像情報は時として有害である。ドラマの暴力シーンを現実ととらえるかも知れない。意味のわからない事故の映像は漠然とした恐怖感を定着させるだけかも知れない。「テレビに子守をさせる」のであれば，テレビの負側面はそのまま負の側面として幼児に影響を与えることであろう。否応なしに身近な存在であるテレビの負側面を解消するために唯一有効であるのが保護者によるコントロールである。我が子の反応を見て必要な指導をおこない，時にはテレビから幼児を遠ざけることによって負側面の影響を最小限にとどめ，正側面の刺激を最大限に生かすことが肝要であろう。しかし，暴力的な映像・刺激的な映像は幼児の心の中に，保護者が制御不能な恐怖感や暴力的傾向をもたらすであろうことは否定できない。真にメディアリテラシーの指導が必要であるのは，メディアの伝える視覚的・聴覚的刺激をいまだ「作り物」として十分に分別することができない乳幼児期ではないかと考える。

Ⅲ　子どもの教育における人間像

教育という営みには当然のことながら，これまでの人類社会の文化を継承するために行われるという側面がある。我々が子どもたちに残すことができたのは，利便性の高い生活であったかも知れないが，人間らしく快適に暮らしていけたはずの環境を残すことはできなかった。次世代はこの負の相続を放棄することはできず，受け継いでいかねばならない宿命にある。だとすれば，我々の世代が犯した過ちを次世代に継承し，次世代に残した負の遺産の償いをしなければならない。

これらの修復はすべてプラグマティックに解決可能な問題であるとは思えない。問題を把握する能力，再び同じ傾向の過ちを犯さないだけの見通しを立てる能力など，次世代に

期待しなければならない部分が多くあるのである。

保護者が自らの子に何を期待するかは百人百様であるのが当然である。自己を十分に認識できない幼児をどのような方向へ導くかと言うことに関しては，一義的に保護者が責任を負うべきことであろう。しかし，現代社会の対人評価システムの運用実態を鑑みるに，保護者の中に漠然とした不安が常に渦巻いているであろうことを容易に想像できるのである。学校も企業も行政も，あらゆる場面で客観的な評価システムを導入している。人間性というとらえどころのない対象に対してもその評価システムが適用される。幼児教育においても例外ではない。ある保育所はトイレの指導が早い，ある保育所は2歳児にアルファベットをマスターさせる，ある保育所は全員水泳ができるようになる，……，具体例を挙げれば切りがないが，測定可能な結果を生み出す施設あるいはシステムのみが評価され，可視的な結果を生まない教育システムはあまり評価されることがない。おけいこごとを多数こなしていることは評価が容易であるが，個性的なものの見方や考え方を評価する指標がない。評価される部分を自らの子に身につけさせようとすることはかつての「受験戦争」の低年齢化に過ぎないのではあるまいか。否，それよりタチが悪いことかも知れない。受験において評価対象となったのは人格そのものではなく「受験学力」であった。しかし，昨今の評価システムはその対象を広げることによって「人間性」の評価に転用しようとしているのである。

望まれる人間像というのはひとつに定めることができない。しかしながら，自らの子をいかに導くことが自らの子にとって最も重要であるのかということを考えるために，保護者や教育者が今よりももっと多角的に人間を考察し，成長という現象を奥深く捉える必要があることは言うまでもないことである。

Ⅳ　おわりに

筆者の成長期には，水とは水道から供給されるものであり，それが自然の恵みの一部であると感じていた。しかしながら，ここ10数年ほどの間，筆者は水道の水を飲料として使っていない。これは筆者が大阪府内から奈良盆地で生活を営んでいるという地理的な条件によるところも大きいかも知れないが，ここ20年ほどの環境悪化は水と空気と安全は「タダ」であるという我が国の常識をすっかり覆してしまった。多くの住民はミネラルウォーターや浄水器によって飲料水を得て，温湿度調整とと空気清浄機能が働く室内で暮らしている。我が家の近隣でもほとんどの家庭が民間の警備会社と契約を結んでいる。人間を外部の空間から遠ざけているのは，我々人間社会がおこなってきたことの結末であるということを我々は自覚しなければならないであろう。外部から保護されなければ暮らせない環境は我々が作った環境である。自らの生活環境すら保全できない不明と愚行は十分反省に値する。

筆者が「食の教育」の問題を考察するにあたって幼児期からの成長過程における刺激という大きな文脈に位置づけるべきではないかと考えるにいたったのは筆者の長子の生育でさまざまな不安要因を実感したことによる部分が大きい。

筆者の世代の頃にはさほど目立たなかった「アトピー」（食物やハウスダストによるアレルギー）は，現代では乳幼児を育てる保護者の大きな不安の一つである。高度経済成長の時期には「工場の排煙」すらも経済発展のシンボルと思われていた向きがあった。しかし，我々が発展の見返りに得たのは，生き物が住めない環境にしか過ぎなかったのである。アレルギー症状の典型として取り上げられる「杉花粉症」は，戦後の杉の植林と大気汚染

の相乗作用によるものであることが明らかになっている。新建材に対する過敏反応も珍しくない。さらにこの夏になってから大きく報道されているアスベスト被害なども，環境汚染のほんの一例に過ぎないのであろう。

その一方で，現代人は「健康」であることを希求する。矛盾や統計的誤りをはらんだまま，テレビメディアの推奨する食材をこぞって買い求める現象などは，我々が未だ環境の一部としての食，生命を育むものとしての食を正しくとらえていない証なのではあるまいか。

不安は時として責任を第三者に転嫁することで解消される。子どもの問題行動が生じたときに，学校や保護者の対応が問題であるということで部分的な改善はなされることがある。そして他でもそれに倣って種々の対応がとられるわけである。しかし，問題行動は次々と生じてくる。すべてを特殊ケースととらえるのは逃避である。頻発する社会問題は，社会そのものが構造的な欠陥を持っている証であると受け止めなければならないであろう。子どもの教育は，保護者と学校のみの問題ではない。来るべき未来社会にいかなる人間が求められるのかという人間像が語られ，目標の一部が共有されなければならない。子どもの発達は，国家，自治体，地域社会，家庭，学校の相互の緊密な協力関係によって支援されていかなければならない。それは学校の意識改革や，指導力不足の教師の排除によって実現するものではない。社会教育，生涯教育の一環として，子どもの生育環境を考察すること，そしてその生育環境を構成する生活主体のひとりであることが社会の構成員に自覚されるところから，真に有効な教育改革の出発が見られることであろう。

先にも述べたように，望まれる人間像を観念的に共有するのはたやすい。たとえば「良さ」としてとらえられる「主体性」や「協調性」がそれに当たる。しかし，それが具体的場面で相反するものとして出現するケースは珍しいことではない。しかし，「良さ」を要素の還元せずに，一個の人格の中に位置づけて全体的に把握しようとすれば，現実の行為に含まれるものを「主体性あり」として把握すべきか，「協調性なし」と把握すべきかの解答は自明である。課題となるのはその場の指導者が，それを判断可能な人物であるかどうかという点にかかっている。

多くの調査では，子どもの学習時間やテレビの視聴時間，家族との会話時間などの指標によって子どもの生活の変化を説明し，種々の問題状況の原因分析に役立てようとしている。こうした試みが無力であるわけではないが，子どもの可能性や問題状況を把握するために十分であるとは言えない。重要なのは数値として明示される「量」ではなくて「質」なのである。読書の価値が子どもの読んでいる「本」の価値を離れて決めることができないのと同様に，学習や会話も，それらがいかなる内実をもっているかということと切り離して考えることはできない。たとえば1学期の成績が悪かった子どもを責めるのか励ますのか。責めるにしてもどこがなぜできなかったのかを一緒に考えるかどうか。激励するにしてもどのような取り組み方をすれば良いのかを一緒に考えるかどうか。このことによってその価値は大きく変わってくる。「駄目じゃないか」，「もっと頑張れ」という空虚なアドバイスは無関心よりもいくらか「まし」であるという程度の価値しかもたらさない。

現在の日本人はおそらく，これまでの社会の価値観が適用不能であることを知って愕然としている。そして，自らの社会観・人間観に対する自信を喪失している。保護者や教育者が自信を持てない指針は，子どもたちが目標とするにはあまりにも頼りない。すべての社会人に「正しさ」を求めることはできないし，統一的な正しさを決定できる場面も少な

いであろうと思われるが，目の前の子どもに対してよりよい方向に伸びるための基準と支援のための手だてを考えることができる程度の資質は必要である。現在は保護者や教育者が果たすべきこの社会的機能を一部の団体に肩代わりさせているようであるが，国家が主導権を握るのが好ましくないのと同様に，第三者が浅薄な観察のみで決定することもまた好ましくないと思われる。子どもの環境の充実のためには，教育－環境－社会改革が一体となって動き出すことができるような連携の受け皿と，個々人の意識改革が必要である。そのための教員養成と一般社会人の教養教育の必要性を求めることを本稿の主張としたい。

＜参考文献＞

○須藤敏昭『現代っ子の遊びと生活』（青木書店，1991年）
○勉誠出版『GYROS』12号（2005年３月）
○バーバラ・コロローソ（田栗美奈子訳）『子どもに変化を起こす簡単な習慣』（PHP研究所，2000年）
○新潮社発行『考える人』（2004年秋号）
○農文協『若者はなぜ農山村に向かうのか』（『現代農業』2005年８月号臨時増刊）
○野本寛一『栃と餅』（岩波書店，2005年）
○石原慎太郎／養老孟司対談「子供は脳からおかしくなった」（文藝春秋社『文藝春秋』2005年８月号所収，130～142頁）
○前屋毅「だから学習塾に行く」上・下（朝日新聞社『論座』2005年８月号116～123頁所収，及び9月号208～215頁所収）
○アラン・ベルトズ（隠岐さや香訳）「視点変化の生理学」（青土社『現代思想』2005年７月号所収，154～169頁。
○斎藤直子「進化し続けるイメージ形成－デューイ，カベル，経験としてのアート－」（青土社『現代思想』2005年７月号所収，176～195頁。
○石牟礼道子「山，海，風から人間が切り離されてしまった」（岩波書店『世界』2005年８月号所収，40～47頁）
○南里悦史『改訂　子どもの生活体験と学・社連携』（光生館，1999年）
○佐伯胖『幼児教育へのいざない』（東京大学出版会，2001年）
○加藤繁美『子どもの自分づくりと保育の構造』（ひとなる書房，1997年）
○広田照幸『教育には何ができないか』（春秋社，2003年）
○至文堂『現代のエスプリ　子どものいる場所』2005年８月号

The Meaning of the Life Experience of the Entering School Former Term as a Starting Point of the Growth and Subject —Use for the Education Resources Which Exist in the Daily Life Space and Approach— to the Environmental Improvement

IIJIMA, Toshifumi

Social Studies Education, Osaka Kyoiku University, Kashiwara, Osaka 582-8582, Japan

This paper is examined by placing all of the things which exist in the daily life of the child before entering school, or the matter on an educational opportunity. Then, I aim at raising the guidelines to attempt effective use for those educational resources, and concrete part abbreviation and a subject.

By the way, what kind of educational value is included, or the various elements which become the obstruction when those educational resources realize educational value are something with various educational resources. And, the means to change those inhibition factors into the various worthwhile factors is somewhat ……. As long as it is possible, I want to make "the educational value of the daily experience" clear concretely.

I examined child's daily life with the following viewpoint.

1) Lifestyle
2) Infants' school goes frequently.
3) Gender
4) Decrease in birthrate
5) The ill effect of the urbanization
6) The space of play and toy
7) Infant's information environment

I think like this. The subject to provide an educational platform and to control must be always cleared even if an educational opportunity in the child's daily life is found in many and that validity is expected. A subject class can't cover all of the children's growth in the first place. We must indicate that it can be made to the children before we enter school about the part beyond the subject class clearly.

Not only the Board of Education and teachers but also a state, self-governing body is more necessary for a plan to do school education and to manage it with a citizen of the community. Not only the Board of Education and teachers but also a state and self-governing body is more necessary for a plan to do school education and to manage it with a citizen of the community. It is not that school and a state should decide where of the children's personality is made to expand and what kind of human being you should raise it as. That should be decided by children and a

protector, and school and a state shouldn't interfere in that.

But, even if "a desirable human being" is a common view in the society, and it depends, and a children's guidance policy isn't found automatically. Society won't receive that if the realization process of the ideology isn't shared even if an ideology corresponds. The formation of the social consensus in this point and cooperation are the most important.

Key Words : daily life, children, infant, the joint ownership of the ideology